

柔（やわら）の道と

その道の続き

少し前から気になっていた書籍がありました。11月20日に購入し、先日の三連休で読み、深く感銘を受けました。タイトルは「柔の道～斉藤仁さんのこと～」希代の柔道家でオリンピックも2大会連続で金メダルに輝いた方であり、皆さんが生まれる前の名選手です。病を患い、2015年、54歳という若さで亡くなりました。

この本の編集者は、当時世界の柔道界に圧倒的な強さで君臨した山下泰裕さんです。斉藤さんは、山下さんを目標にして、猛練習に打ち込み、強くなっていきました。国際試合に臨む時は、二人そろって、圧倒的な強さを世界に示し、まさしく「世界に敵なし」の二人でした。

斉藤さんの多くのエピソードを、友人、後輩、恩師、そして山下さんご自身が、そして最後の章では斉藤さんの二人の息子さん、そして奥様も語っていました。

1984年のロサンゼルス、1988年ソウルオリンピックを連続で制覇した斉藤さんは、世界選手権も制覇していましたが、1つだけ手にしていないタイトルがありました。それは、全日本選手権でした。世界で敵なしだった当時の山下選手には、ずっと勝つことが出来ずにいました。山下選手に勝つために猛練習に明け暮れ、山下選手ご本人にも何度も胸を借りていたそうです。当時の山下選手は「あまりに斉藤がしつこいから、彼の姿が見えると隠れたこともある。」と綴っていました。それ程、斉藤選手には高い壁であり、目標だったそうです。

しかし互いに、年齢を重ね、しかも大怪我也も経験し、全盛時代は過ぎていきます。「山下さんが引退しないうちに、もう一度対戦して勝ちたい。」とずっと思い続け、山下選手もそれを理解していて、「最後は斉藤と戦って引退する。斉藤が納得した形でなければ引退できない。」と決めていたそうです。そして、8度目の対戦が実現します。

私もその対戦をテレビ観戦していました。壮絶な試合となり、判定に持ち込まれました。うっすらと残っている私の記憶では「斉藤選手が勝ったかな。」と思いました。しかし判定は山下選手の勝ち。マスコミも「斉藤が勝っていたのではないか」と報道する程、微妙な判定でした。この試合を終えて、山下選手は引退します。斉藤選手は生涯一度も山下選手に勝つことはできませんでした。しかし、ずっと以前から尊敬しあっていた仲でもあり、その後は二人そろって、日本柔道界の強化スタッフのトップに立ち、後輩の指導に当たります。現在、山下さんは、日本スポーツ界の中心として仕事をしていますが、早すぎる後輩の死を悲しみながらも、斉藤選手の「奥様からいただいた形見のネクタイをして、彼と一緒に仕事をしている」との事です。

2014年、斉藤さんは、病の診断を受けます。この時は、柔道ナショナルチームの強化コーチでもありました。その後、病名や病状を人に話すこともなく、チームの強化に邁進します。しかしながら、少しずつ痩せていく斉藤さんを周囲の方々は「おかしいな」と気付いていたようです。病の進行はあまりに早く、2015年1月20日、家族に見守られながら眠りにつきました。

斉藤さんのように世界で大活躍した選手と比較するには、あまりに申し訳なく思いますが、私の父親も同じ病気で、同じように発病して、同じ症状を経ながら、1年ほど病気と闘いながら亡くなりました。最終章の奥様の回想を読みながら、父親の姿を思い出し、なんとも言えない気持ちでし

た。そして偶然にも、命日まで同じの1月20日であり、何かのご縁かなと勝手に思っていたところ、そう言えば、本を購入したのも月命日の20日だなあと、勝手にこじつけて、この本を購入したのも偶然ではなく必然だと、さらに無理矢理こじつけていました。

この本は10名の回想出筆として編集されています。先輩であるオリンピック金メダリストの上村春樹さんは、「彼は柔の道を極めようとした人」と話しています。「柔の道とは、世の中のためになる人であれ」ということだそうです。「精力善用（心身の力を善いことに有効に使う）自他共栄（己の栄えのみを目的とせず、他とともに栄えるようにする）」これが、「柔の道」だそうです。「斉藤は、それを極めようとした人物であり、自分が勝っても、自分の弟子が勝っても、畳の上ではガッツポーズなどするべきではない。なぜなら同じ畳の上に一緒に戦った敗者がいるからだ。その敗者は同じ道を究めようとする仲間だから。常日頃からそう話していた」そうです。ある国際大会で自分の教え子が勝って、そのまま余韻にひたり、寝転がっていた時に、「何をやっているんだ！ 立て」と猛然と叱ったそうです。外国人の審判が「どうして怒るんだ。勝ったのだからいいじゃないか。」と話すと「いつまでも寝転がっていては相手に失礼だ。」と答えたそうです。「礼が終わるまでは試合は続いている。そこまで感情を抑えられないようではあまりにも幼い。」

後輩たちは回想の中で「とても厳しい人だった。あまり褒められた事はない。近くで指導されるのが怖かった。」と話します。しかし、今、彼らも現役を退き、若い世代に教えるようになって初めて「あの人の指導が、今になって理解できた。」「あの時の指導は、こういうことだったのか。」と理解できるそうです。そして、「斉藤さんの教えを生かして、自分なりに現代ふうアレンジして教えています。」と話します。厳しく、そして親身になって関わってくれた人の気持ちが数年後に「そういうことだったのか」と気付くことがあります。その時は理解できない事であっても、後の自分の人生に大きな影響を与えるということがあります。

二人の息子さんは、大選手だった自分の父親の姿を感じながら多感な時期を過ごし、気がついたら柔道を始めていたそうです。普段の生活での父親の優しさ、そして柔道をしている時の「鬼のような指導者」の極端な差に戸惑い、迷い、苦しみ、そして荒れたこともあったそうです。兄である一郎さんは、身体が弟より小さく、今は「弟のサポート」をすると心に決めているそうです。弟の立（たつ）さんは、父親を越える選手になるのではないかと期待されるほどの柔道家として成長しています。「鬼のような父親」の指導を受け、「やらされていた柔道」から今は本気で「強くなりたい」と猛練習に励んでいるそうです。亡くなる日、意識が朦朧としている父親が立さんに発した最後の言葉が「稽古に行け!」だったそうです。今の心境は「もう俺はガキじゃない。身体が震えるような柔道を父親に見せたい。」と心に誓っているそうです。

斉藤さんは生前、奥様に「自分の人生には3つの金メダルがあると思っている。1つは自分が獲得したもの。1つは教え子達が獲ってくれた金メダル、3つ目はこれから。自分で自分に金メダルをかけてあげられるような人生を歩んでいきたい。」と話していたそうです。そして奥様は、「だから私は、あの太い首、大きな肩に3つ目の金メダルをあげたいと思います。主人が遺してくれた最大の財産は人との絆です。今、私たち親子は、主人の先輩や後輩、教え子の方々に、様々な面で支えていただいています。ひたすら柔の道を歩んだ人でしたが、私たちもその道の続きを歩いていきたいと思います。主人も一緒に歩き続けてくれるでしょう。だから、お別れの言葉など言う必要はないんだと私は思っています。」

「柔の道」の究極は「人との絆」なのかもしれません。柔道だけでなく、他のスポーツ、芸術や文化、教育、そして日々の生活も、互いに認め合い、尊重しあう中で生き生きと輝くものだと思います。それぞれの場で、作法を守り、相手への敬意を示すことが重んじられる「礼節」があります。古いけれど、同時に新しくもある、忘れてはいけない永遠の課題追求が「柔の道」なのかもしれません。